

エクサポスティライ スティヒラ
主日の 差遣詞 及び早課の自調詞即福音の 讃頌

スティヒラ エクサポスティライ
早課の 讃頌 は帝レロの作、 差遣詞 は其子コンスタンティン帝の作なり。

エクサポスティライ
第一の 差遣詞

われら もんと とも やま のぼ しん もつ てんじょう ちか けん う
我等は門徒と偕にガリレヤの山に登りて、信を以てハリストスが天上地下の權を受けし
ことを見、其如何に萬民に父と、子と、聖神との名に因りて洗を授くるを教へ、又
きみつしや とも よ おわり あ やく たま まな
機密者と偕に世の終末まで在らんことを約し給ふを學ばん。

生神女讃詞

しょうしんどうていじょ なんじ そのかつ い ごと みつかめ はか ふつかつ み
生神童貞女よ、爾はハリストスが、其嘗て言ひし如く、三日目に墓より復活せしを見て、
もんどう とも よろこ たま しゅ かわら あらわ さいじょう さず かつこれ と あか ちち
門徒と偕に喜ひ給へり。主は彼等に現れて、最上の教を授け、且之を説き明し、父と、子
と、聖神との名に因りて洗を授くるを命じ、我等に其復活を信じ、又爾を、少女よ、讃榮
せんことを諭し給へり。

スティヒラ
早課の 讃頌、第一調。

もんどう やま ゆ しゅ ち のぼ さき あらわ かわら これ ふくはい いっさい けん
門徒は山に往き、主は地より升らんとする前に現れしに、彼等は之に伏拜して、一切の權
の彼に授けられしを聞き、其死よりの復活と天に升ることとを傳へん爲に彼より天下に遣
されたり。偽なきハリストス神、我等の靈の救主は世世に彼等と俱に居らんことを約
し給へり。

主日の差遣詞及び早課の福音の 讃頌 五

主日の差遣詞及び早課の福音の 讃頌 六

エクサポスティライ
第二の 差遣詞

いし うつ み けいこうじょ よろこ けだししょうしや はか うち ざ み かわ これ い
石の移されしを見たる攜香女は喜べり、蓋少者が墓の中に坐せるを見しに、彼は之に謂
へり、視よ、ハリストスは興きたり、其門徒及びペトルに語げて言へ、急ぎてガリレヤの山
に往け、彼は彼處に於て爾等に現れん、嘗て其友に預言せしが如し。

生神女讃詞

てん し なんじ いまだはら さき どうていじょ よろこ たずさ てん し またなんじ はか
ハリストスよ、天使は爾が未妊まれざる先に童貞女に慶べよを攜へ、天使は又爾の墓
の石を移せり。彼は哀に代へて言ひ難き喜を示し、此は死に代へて爾生命を賜ふ主
を傳へ、爾を讃揚して、女等及び機密者に復活を語げたり。

スティヒラ
早課の 讃頌、第二調。

とも きた こうりょう たずさ おんなたち いか そのぞみ おこな まど いし すで うつ
マリヤと偕に來りし香料を攜ふる女等は何如に其望を行はんと惑へるに、石の已に移
されしを見、神聖なる少者は現れて、彼等の靈の驚駭を鎮めて云ふ、主イイススは起
きたり。故に傳道者たる彼の門徒にガリレヤに疾く往きて、彼が生命を賜ふ者及び主とし
て死より復活せしを見るべきを傳へよ。

エクサポスティライ
第三の 差遣詞

ハリストスの復活せしことは誰も信ぜざるべからず、蓋彼はマリヤに現れ、後に村に往
く者に見られたり、又十一の機密者に其席坐の間に現れて、彼等を洗を授けん爲に遣
して、天に升り、彼處より降りて、多くの休徴を以て傳道を固め給ふ。

生神女讃詞

こんえん みや はなむこ い ごと こんにち はか かがや い ひ じごく とりこ し むな
婚筵の宮より新娶者の出づるが如く、今日墓より輝き出でたる日、地獄を擲にし、死を虚
しくせし主よ、爾を生みし者の祈禱に由りて、我等に光を降し給へ、心と靈とを照
す光、衆人を爾の戒の途及び平安の道を行くに向はしむる光なり。

スティヒラ
早課の 讃頌、第三調。

きゆうせいしゅ し ふつかつ あらわれ ふくいん しん もんと ころ
救世主の死よりの復活と顯見とを福音する「マグダリナ」マリヤを信ぜざる門徒は心の
かたくな せ きゆうちよう きせき ぐそく でんどう ため つかわ
頑なるを責められたれども、休徴と奇跡とを具足せられて、傳道の爲に遣されたり。
そのちなんじ しゅ げんし ひかり のぼ かげら あまね ことば つた きせき もつ これ しょう
其後爾は、主よ、原始の光なる父に升起、彼等は徧く言を傳へて、奇跡を以て之を證
せり。故に人を愛する主よ、彼等に照されて、我等は爾の死よりの復活を讚榮す。
エクサボステイライ

第四の 差遣詞

主日の差遣詞及び早課の福音の讚頌 七

主日の差遣詞及び早課の福音の讚頌 八

われら しょうとく かぎ いのち ほどこ はか うち ころも ひかり ひと た けいこうじょ おもて ち ふ
我等は諸徳に飾られて、生を施す墓の中に衣の光れる人の立ち、攜香女が面を地に伏
せたるを見て、天を司る主の復活を知り、ペトルと偕に生命の墓に趨り、成りし事を奇
として、ハリストスを仰ぎ見るべし。

生神女讚詞

よろこ とい しゅ なんじ げんそ かなしみ へん なんじ ふつかつ よろこび よ い たま ゆえ
慶べよと言ひし主よ、爾は原祖の悲を變じて、爾の復活の喜を世に入れ給へり。故
いのち ほどこ しゅ なんじ う もの よ ころも てら ふつかつ ひかり なんじ じれん ひかり われら
に生を施す主よ、爾を生みし者に因りて、心を照す復活の光、爾の慈憐の光を我等
につかわ なんじ よ ひと あい かみびと こうたい なんじ ふつかつ き
に遣して、爾に呼ばしめ給へ、人を愛する神人よ、光榮は爾の復活に歸す。
ステイヒラ

早課の 讚頌、第四調。

ハリストスよ、朝甚早く女等は爾の墓に來りしに、其慕へる屍を見ざりき。之が爲
まど とき かがや ころも き もの かげら まえ た い なん い もの ししゃ うち
に惑へる時、輝ける衣を衣たる者は彼等の前に立ちて云へり、何ぞ生ける者を死者の中
たず かげら たらかじめ い こと ふつかつ なん そのことば おも かげら しん しみ
に尋ぬる、彼は預言ひし如く復活せり、何ぞ其言を憶はざると。彼等は信じて、見し
つた そのふくいん むなしごと か か もんと なおころ おそ もの しか
ことを傳へたれども、其福音は空言とせられたり、斯く門徒は尚心の遅き者たりき。然
れどもペトルははしゆみ ころも うち なんじ きせき さんえい
れどもペトルは趨り往きて見て、心の中に爾の奇跡を讚榮せり。
エクサボステイライ

第五の 差遣詞

せいめいおよ みち せいめいおよ みち せいめいおよ みち
生命及び道なるハリストスは死より復活して、クレオパ及びルカと偕に旅して、エムマウ
おい ばん さ ときかれら し しゅ どちゆうかれら かた くるしみ う こと せいじよ かな
スに於て餅を擘く時彼等に知られたり。主が途中彼等と語り、苦を受けし事の聖書に應
へるを明しし時、彼等の靈と心とは燃えたり。我衆彼等と偕に呼ぶ、主は實に復活せ
り、ペトルにも現れたり。
あらわ

生神女讚詞

わ ぞうせいしゅ われなんじ むりよう じんじ うた けだしなんじ だらく じんせい う これ すく ため
我が造成主よ、我爾の無量の仁慈を歌ふ、蓋爾は墮落せし人性を受けて、之を救はん爲
おのれ つく いた こうおん しゆさい なんじ かみ あまん いさぎよ しんじょ み と われ
に己を罄せり。至りて宏恩なる主宰よ、爾は神として甘じて潔き神女より身を取り、我
ひと もの な じごく くだ たま なんじ う もの きとう よ われ すく
と侘しき者と爲りて、地獄にまで降り給へり、爾を生みし者の祈祷に因りて我を救はん
ほつ
と欲したればなり。
ステイヒラ

早課の 讚頌、第五調。

ああ なんじ ていせい げい かな なんじ ひとりつつみぬの もつ なんじ ふつかつ し
嗚呼ハリストスよ、爾の定制は睿智なる哉。爾はペトルに獨裹布を以て爾の復活を知
らしめ、ルカ及びクレオパと同行して語れり、語れども直に己を顯さず、故にイエ
きた もの うちなんじひとりそのろん いささか あずか ごと せ せいじよ しか
サリムに來りし者の中爾獨其論ずることに聊も與らざるが如きを責められたり。然
いっさい ぞうぶつ えき てん しゅ なんじ かげら おのれ かん よげん と あか またばん さ
れども一切を造物の益に轉ずる主よ、爾は彼等に己に關する預言を解き明し、又餅を擘
ときかれら し かげら ころも これ ささき も なんじ しめ そのちかれら もんと あつ
く時彼等に識られたり、彼等の心は是より先にも燃えて爾を示せり。其後彼等は門徒の聚
とき すで あきらか なんじ ふつかつ つた これ より われら あわれ
まれる時、既に明に爾の復活を傳へたり。之によりて我等を憐

主日の差遣詞及び早課の福音の讚頌 九

主日の差遣詞及び早課の福音の讚頌 一〇

たま
み給へ。

第六の 差遣詞

救世主よ、爾は己の人性を示して、墓より復活せし後に門徒の中に立ち、彼等と共に食ひ、彼等に悔改の洗禮を教へ、直に天の父に升起、門徒に許約せし撫恤者を遣し給へり。至聖なる神人よ、光榮は爾の復活に歸す。

生神女讃詞

至聖なる童貞女よ、萬物の造成主及び神は爾の至淨なる血より人體を受けて、我が朽壞せし性を全く新たにし、爾を産の後に産の前の如く童貞女に止まらしめ給へり。故に我等皆信を以て爾を崇め讃めて呼ぶ、世界の女宰よ、慶べ。

早課の 讃頌、第六調。

眞實の平安たるハリストスよ、爾は復活の後に爾の神聖なる平安を門徒に與へしに、彼等は懼れて、見る所は神なりと意へり。然れども爾は其靈の驚騒を鎮めん爲に、己の手足を彼等に示せり。彼等未だ信ぜざれば、食に與ること、先に語りし所を憶ひ起さしむることとを以て其智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。遂に父の許約せし者を遣さんことを約し、彼等を祝福して、離れて天に升起給へり。故に彼等と共に我等爾に伏拜す。主よ、光榮は爾に歸す。

第七の 差遣詞

主を取れりとマリヤは言ひしに、シモンペトル及び他の機密者、ハリストスの愛せし者は墓に趨れり、二人趨り附きて惟布のみ墓の中に置き、又首を裹みし巾の別に置けるを見たり。故に尚黙してハリストスを見るに至れり。

生神女讃詞

我が大仁慈なるハリストスよ、爾は我が爲に至大至榮なることを行ひ給へり、蓋言ひ難く童貞女より生れ、十字架に釘せられ、死を忍び、光榮の中に復活して、我等の性を死より解き給へり。ハリストスよ、光榮は爾の仁慈に歸す、光榮は爾の能力に歸す。

早課の 讃頌、第七調。

視よ、味くして甚早し。マリヤよ、何爲れぞ墓の側に立ち、思大く味みて、イイススが何處に置かれたるを問ふ。趨り集れる門徒を見よ、如何にか彼等は布と首の巾とに因りて復活を曉り、又聖書に此の事の録せるを憶ひ起しし。彼等と共に亦彼等に因りて我等も信じて、爾生を賜ふハリストスを讃め歌ふ。

第八の 差遣詞

主日の差遣詞及び早課の福音の讃頌 一一

主日の差遣詞及び早課の福音の讃頌 一二

マリヤは二の天を墓の中に見て驚けり、又ハリストスなるを知らずして、園丁なりと意ひて、主よ、爾は我がイイススの屍を何處に置きたると問へり。然れども其呼ぶ聲に因りて救世主親なりと知りて、聞けり、我に捫る勿れ、我父に升ると我が兄弟に告げよ。

生神女讃詞

童貞女よ、爾は言ひ難く聖三者の一を生み給へり、彼は二の性と二の行動とを有つ一位なる主なり。女宰生神女よ、常に彼に信を以て爾に伏拜する者を凡の敵の悪謀より救はんことを祈り給へ、我等皆今爾に趨り附けばなり。

早課の 讃頌、第八調。

マリヤの熱き涙の注がるるは徒然にあらず、蓋視よ、教ふる天使に遇ひ、イイスス親

を見るを獲たり、然れども弱き女として、亦地上の事を思ふ、故にハリストスに捫るを許されず。唯傳教女として爾の門徒に遣されて之に福音を攜へ、爾が父の嗣業に升るを告ぐ。主宰主よ、彼と偕に我等をも爾の顯見に勝へさせ給へ。

第九の 差遣詞

主宰よ、門閉ぢたるに、爾は使徒の處に入り、平安を與へ、氣を嘘きて彼等を至聖神に満て、罪を縛り及び釋く權を授け、又八日を越えて爾の脅及び手をフォマに示し給へり。我等は彼と偕に呼ぶ、爾は主及び神なり。

生神女讃詞

神の聘女、至聖なる童貞女よ、爾は己の子の三日目に墓より復活せしを見て、其苦を受くるを見し時に母として抱きたる憂を悉く解き、喜に満たされて、其門徒と偕に彼を尊みて歌へり。求む、今爾を生神女として承け認むる者を救ひ給へ。

早課の讃頌、第五調

ハリストスよ、爾は末の時、七日の首の日既に暮れて、爾の友に現れて立ち、閉ぢたる門を過りし奇跡を以て爾の死よりの復活の奇跡を證し、門徒を喜に満て、之に聖神を賜ひ、諸罪を赦す權を授け、フォマにも不信の激浪に沈むことを許さざりき。仁慈なる主よ、我等にも眞の智慧及び諸罪の赦を與へ給へ。

第十の 差遣詞

ティワエリアダの海に昔ゼウェデイの二子、ナファナイル及びペトル、フォマ及び他の二人漁せしに、ハリストスの命に由りて網を舟の右に施したれば、多くの魚を獲たり、ペトル主を知りて彼に濟れり。斯く主は其門徒に第三次に現れて、之に燃ゆ

- 主日の差遣詞及び早課の福音の讃頌 一三
- 主日の差遣詞及び早課の福音の讃頌 一四

る火の上に餅及び魚を示し給へり。

生神女讃詞

生神童貞女よ、爾を歌ひ、愛を以て讚美する者の爲に三日目に墓より復活せし主に祈り給へ、蓋我等皆爾を救の避所及び主の前の轉達者として有つ、皆爾の嗣業及び諸僕として爾の保護を仰げばなり。

早課の讃頌、第六調。

ハリストス救世主よ、爾が地獄に降り、又死より復活せし後、門徒は爾に別るるを憂ふるに因りて、仍舊業に循ひて舟に登り、網を施ししに、魚なかりき。然れども爾現れて、萬物の主宰として、網を舟の右に施すを命じたれば、言は忽行はれて、多くの魚は獲られ、且奇妙なる晩餐は地上に備はりて、爾の門徒は其時之に與れり。人を愛する主よ、今我等にも靈智を以て之を楽しむを得しめ給へ。

第十一の 差遣詞

主は神聖なる復活の後に三たびペトルに我を愛するかと問ひて己の羊の牧首と爲せり。彼はイイスの愛せし所の者の後に從ふを見て、主宰に問へり、斯の人は如何。答へて曰へり、我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、友ペトルよ、爾と何ぞ與らん。

生神女讃詞

嗚呼威嚴なる秘密、嗚呼至樂なる奇跡や、死を以て死は全く滅されたり。言よ、誰か歌はざらん、誰か爾の復活と、潔く爾を身にて生みし生神女とに伏拜せざらん。彼の祈禱

よ しゅう
に因りて衆を「ゲエンナ」より救ひ給へ。

ステイヒラ
早課の讃頌、第八調。

きゅうせいしゅ なんじ ふっかつ のち なんじ もんと あらわ そのあい むくい ひつじ ぼく
救世主よ、爾は復活の後に爾の門徒に現れて、ンモンに其愛の報として羊を牧せし
めて、羊群の事を慮るを促せり。故に曰へり、ペトルよ、爾若し我を愛せば、我が 羔
を牧せよ、我が羊を牧せよ。彼は直に友を愛する心を示して、他の門徒の事を問へり。
ハリストスよ、彼等の祈祷に因りて、爾の群を之を滅さんと欲する狼より護り給へ。